



王であるキリスト (ルカ 23:35-43)

あなたにとっての「王であるキリストの祭日」はいつ？

今週一週間は、従来のミサ式次第でささげる最後のミサです。中田神父としては、一刻も早く新しいミサ式次第に移りたいくらいです。ただ、最初はどううまくいかないことも多いだろうなあと心配もあります。皆さんの協力を頂きながら、新しいミサ式次第でささげるミサを充実させていきたいです。

朗読台に「張り紙」をしました。朗読者は次の日曜日から「神のみことば」と唱えなければなりません。それで、うっかり忘れていても思い出すきっかけになるようにと、張り紙をさせてもらいました。そして朗読者が「神のみことば」と言ったら、会衆の皆さんも「神に感謝」とはっきり答えてください。

王であるキリストの祭日、年間の最後の主日を迎えました。今日はちょっと違ったことを尋ねます。皆さんには、忘れられない「王であるキリストの祭日」があるのでしょうか？そしてそれはいつでしょうか？

中田神父にとっては、2019年の「王であるキリストの祭日」です。この日は11月24日でした。これでお分かりでしょうか？思い出せない人のために詳しく言います。この日はフランシスコ教皇様が来日されて、長崎でミサをささげた日曜日、「王であるキリストの祭日」でした。

この日、私たちは大勢で長崎に駆けつけ、ミサに参加しました。ミサに参加できなかった人も、テレビでその様子を見届け、テレビでも参加が難しかった人も、その時間に、それぞれの場所で心を合わせて祈ったはずです。2019年の「王であるキリスト」は、日本中のすべてのキリスト者が、また映像を見た世界中のキリスト者が、「イエス・キリストは王である」と讃えたのです。

あの日、直接ミサに参加した人もいるでしょう。そうでない人もいるでしょう。近くにいたかそうでないかは問題ではありません。もっと大切なことがあります。それはイエスを心から王であると唱えたかどうかです。今週の朗読に立ち帰ります。

朗読は十字架の場面ですが、さまざまな場所からイエスをあざける声が聞こえます。議員たちは、いちばん遠く離れて、他人事のようにあざけります。兵士たちも近寄ってあざけります。そしていちばん近くにいるのが、同時に十字架にはりつけにされた犯罪人です。

犯罪人のうちの一人は、イエスをののしりましたが、もう一人はイエスを「王」として認めました。「イエスよ、あなたの御国においでになるときは、わたしを思い出してください」(23・42)。近くにいるからイエスを王と認めることができたわけではありません。十字架から降りないままのイエスの中に「王の姿」を見つけた人だけが、「あなたの御国においでになるときは、わたしを思い出してください」と言うことができたのです。

フランシスコ教皇様がおいでになったとき、私たちはありとあらゆる

ることを教皇様のために都合を付けました。教皇様が「王であるキリスト」の目に見える代理としておいでくださったからです。ですから今日私たちは、いつもよりもいっそう意識して一日を過ごしたいのです。「王であるキリストの祭日」を祝っている日曜日として、「イエス・キリストは王である」この信仰を再確認する日曜日として、過ごしたいのです。

イエス・キリストのために、何かを横に置いて日曜日を過ごす。ふだん、日曜日にしかできないことを抱えている人もいるでしょう。週に一回の楽しみとして、日曜日に行っている趣味や娯楽があるかも知れません。晴れても雨が降っても欠かさずしている楽しみがあるかも知れない。

それらのどれか一つでも横に置いて、「イエス・キリストは王である」と、自分にも人にも信仰を表すための何かを実行してください。たとえばそれは、家に帰って新しいミサ式次第をていねいに読み返すことでも良いでしょう。

中田神父も、届いた儀式書をよく読み返して、今週一週間練習を積んでおこうと思っています。こうして私たちは、2022年の王であるキリストを、記憶に残る日とすることができるのです。

待降節第1主日(マタイ 24:37-44)